

明治 40 (1907) 年 小林千古『誘惑』 in 巖島神社

江東 5 区マイナス地域
防災を考える会の仲間：
中尾正文氏の祖父小林千
古画伯の『誘惑』の絵を
権禰宜、学芸員の案内で
鑑賞した。

明治 40 年に東京府勸業
博覧会に出品するも、落
選したという。その理由
は根本に仏教への深い信
仰心を持っていたという
千古の、人生観を押し出
した強い作品であるとい
う。「誘惑」の画題の核心
を、ハワイ移民社会の闇
を念頭に置きながら、ど
こまでも悪くなれる人間
の悲惨や、そこにたやす
く落ちてしまう人間とい
う存在の愚かさ、卑小さ
に思いを深めていると。



「誘惑」は、目隠しをされた娘、これから先、誤った道に引き込まうとする悪魔、（その誘いに導かれてはいけない、こちらが正しい道です）と娘に別の方向を指さす天女からなる構成である。間違った道へ行ってしまった一步前の、分かれ径の地点を描いているのということになる。排他的で自家撞着（自身の言動につじつまが合わなくなってしまうこと）的な濁りも含んだ西洋社会の、キリスト教をバックボーンとした合理主義に対し、日本人がそれを進歩ととらえ、正しい思想と感取して、一心不乱に模倣してゆく弊害、その結果としての精神の荒廃を想像させる意図も持つての創作ではあるだろう。ただ、広く社会に視点を置いて、世界に伍する日本社会の在り方に一石を投ずるという意図よりも、殖産興業と軍事力増強の優先で、日本人が歪んでゆきつつあることを危惧し、真に幸福になるために必要なことを、今見つめ直そうではないかと、絵を見る者、個人ひとりひとりへの呼びかけが、この本義であると思う。入賞の名誉を与えなかったお歴々の審査官は、千古のそういう創作動機を、読み取れていない。（私流絵解き館・瀬戸風凧）による。

（注）日露戦争が背景にあったと思われる。悲しい歴史の一コマを痛感させられる。